

甲斐黄金村・ 湯之奥金山博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡—中山金山

No.102

2023.1.19



山口県からお越しくださった高曲さんご家族

年が明けて間もない1月6日、当館は有料入館者46万人目を達成しました。ここまでコロナ禍による来館者の減少が顕著な3年間でしたが、厳冬期にさしかかるタイミングにこの明るいニュースが発信できることは、社会活動における人流回復と活発化のきざしが見えてきたかのよう。

先の45万人目の記念セレモニーから5か月という短い期間で1万人ものご利用をいただけたことは、日々の地道な館活動の努力が実った成果だと考えます。新年のスタートにふさわしい華やかなニュースで2023年卯年、出発です。

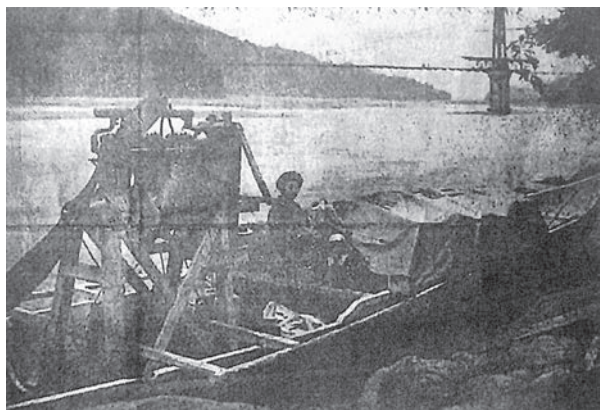
大正12年の地域史点描 -100年前の峡南地域に話題を求めて-

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 出月洋文

この度、2023年の輝かしい新春を迎えましたが、そうした折に100年前のこの地域にはどんなことがあったか、少し時間の襖に穴を開けてのぞき見してみたいと思いました。和暦で言うと大正12年のこととなります。この大正という時期は、たいへん短くも明治と昭和を繋ぐ、とても興味深い変革の時期で、とくに社会経済や文化史の観点で目を見張るものがありました。

当館のある山梨県の南寄りの峡南地域では、富士川が南北に貫流し、地域の特色を演出するものとなっていました。ここでは近世から続く富士川舟運が力強く地域を支えてきていましたが、明治36(1903)年に中央線が甲府まで通じると、富士川を經由する人や物の動きが徐々に小さくなり、東海道線富士駅からの富士身延鉄道(現身延線)が、大正9(1920)年に身延まで延伸されるとこれに一層の拍車がかかることになりました。

そうしたなか、起死回生をかけ、舟運の笹舟に中古航空エンジンを載せたプロペラ船が登場したのは、この大正12年のことで、鯉沢一木井間をより早く結ぶことになりましたが、決定打にはならず、ほどなくして姿を消し、一方の新鋭・身延線は、昭和3(1928)年に甲府までつながり、東海道線と中央線を



プロペラ船(『山梨県史』通史編5 p.609より)

結節する一大動脈となっていきました。

さてその大正12年ですが、その9月の初日に、相模湾を震源とする巨大地震が発生し、首都東京をはじめ広範囲に劣悪な爪跡を残しました。あの関東大震災の発生です。いつも参照している『下部町誌』には「山梨県では、死者19人、負傷者13人。全壊家屋1,763戸、半壊家屋4,994戸を数える前代未聞の大災害」であり、「幸いわが下部町は(略)古関地区で落石による死者2人だけで、他には大きな被害もなく」として、その後に当時18歳だった切房木の加藤善吉さんの生々しい証言を集録しています。

その一部を再録すると「ぶどうを食べようと思って家を出た途端にグラグラッと来た。よろけて立ってはいられない程であった。見ると自分の家の屋根と隣家の屋根がぶつかりそうに揺れている。家の中では棚のびんや茶碗などの器物が落ちて砕ける音がする、向山では石が、木や岩にぶつかってすさまじい音をたてながら転げおちる、田の用水路の水や肥溜は溢れている。時々猛獣のほえるような不気味な地鳴りを伴って、余震が絶えまなく続くので、ほんとに生きた心地はしなかった」(『下部町誌』p.1610)というものでした。

善吉さんの証言の最初の方に出てくるブドウというのは、明治の頃にアメリカより導入され、お盆の時期に収穫できることで既に広まっていたデラウェア種かと想像されます。きっと庭先のような場所にブドウ棚があって、それが食べ頃を迎えていて、それに惹かれて家を出た瞬間に襲い来たった大きな揺れに腰を抜かささんばかりだったようです。

こうした巨大地震、私たちの経験に近いところを顧みると、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災や、2011年3月11日発生した東日本大震災が浮かんできます。いずれも

わが山梨では、100年前に善吉さんが体験したような地鳴りがしたり山が崩れたりということは無かったかと・・・。

この関東大震災の起因となった巨大地震については、その後の研究により過去70年ほどの周期で起きてきていることが明らかにされていますが、現実には関東大震災からは100年経過となっていて、いつまた起きてもおかしくないと言われていています。そうした中で東日本大震災からでも、すでに干支が一回りするほど時間が経過し、被災地から離れたところでは危機感がだいぶ薄くなってしまっている感じがします。こうした話題をきっかけに、もう一度気を引き締めることが重要ではないかと思えます。

また話題が転じますが、これもよく利用する『山梨県のあゆみ』という2008年刊行の山梨県史概説編を開いて、大正期の文化史にかかる記述を繰っていた折、大正12年に柳宗悦が最初に木喰仏に接した時のこと(同書p.306)が、これも100年前のことだったんだなあ、目にとまりました。詳細を確かめたく、手元の木喰さんの研究書(身延町刊『生誕300年木喰展』2018など)で確認すると、どうやら翌大正13年が正しかったようでした。いずれにしても当館の身近なエリアで100年ほど前の歴史をひもといたときに、この“木喰仏の発見”もたいへん重要な出来事であったと言えるもので、その意義を再認識するところです。

最後に、これは事件というようなことではないのですが、大正12年の1月13日に、あの加藤為夫先生が誕生されています。

私が初めて先生の警咳に接することができたのは、1983年にあった鏡円坊(梅平)境外の町史跡・南部氏館跡の調査の折で、遠い記憶をたどると、調査の要点と関わるこの史跡をめぐる歴史を詳らかに紹介して下さった講義を拝聴したものでした。この年の3月に身延高校の教鞭を最後に定年退職され、いよいよ地域の歴史研究に本格的に踏み出されたころのことだったと思われまます。次にお世話

になったのは、1990年代の後半、その頃整備が進んだ下山のクラフトパークの中の「煙硝蔵跡」の取り扱いをめぐることでした。これについてはこの『博物館だより』第97号のコラムの中でふれていますので、紙幅の関係で重複を避けませんが、忘れ難いものでありました。



第27回公開講座開催状況(中央に先生、右は奥様)

当館としても、加藤為夫先生には、2002年11月に開催の第27回公開講座として、「毛無山中山金山遺跡出土陶磁所見」と題したご講演をいただいております。加藤先生は、若い時分から金山遺跡の踏査もなされていて、そこで確認した陶磁器や鉾山臼などの資料についても多くの情報を収集されており、多岐にわたる長年の研究の一端についてお話しいただいたものでありました。すでに視力をなくされていて、奥様の手助けを得つつのご講演でしたが、生誕100年の今なお、記憶に留めておくべき教育者・研究者です。

この加藤先生、2008年に他界なされましたが、先生のご生涯を偲ぶことができるご本があります。若い頃を中心にした半生記ともいえる『兵営記』がそれで、不自由な視力の中で書き留められた回顧録を甥御さんが「解説」されて刊行されたものです。従軍されていた頃の話の中に、“甲金”が出てくる一節がありました。従軍先のジャカルタの博物館で、「我が郷里、早川や毛無山からの金で(略)作られた金貨に会い、私は言いしれぬ感慨を覚えた」と、為夫先生ならではのシーンだと強く印象に残りました。

11/11 金～13 日 佐渡金山隣地研修

「佐渡島の金山」としてユネスコ世界遺産への推薦から登録実現へ向けて取り組み中の佐渡金山。鉱山史の専門の視点から佐渡金銀山の現場を実際に目で見てその歴史的重要性を確認・周知し、情報交換も目的とした日本鉱業史研究会主催の臨地研修に、小松・伊藤両学芸員が参加しました。この見学会は、佐渡市や、金山操業エリアを所有・管理するゴールデン佐渡など関係各所による研究へのご理解とご協力をいただいたうえで実現となったものです。



佐渡市の宇佐美 亮氏（世界遺産推進課長）にご案内いただき、新穂^{にいぼ}銀山 - 百枚間歩・露頭掘跡、父の割戸、大切山坑、西三川砂金山、金挽白の石材採取跡、鶴子^{つるし}銀山 - 大滝間歩・弥喜知^{やきち}間歩など、一般には公開されていない場所も含めて3日間にわたり佐渡金銀山を構成する歴史遺構を見学しました。

2日目は、一般聴講可能な研究発表会が「きらりうむ佐渡」で開催されました。宇佐美氏による佐渡金銀山遺跡のガイダンスから始まり、久間英樹氏（松江工業校高等専門学校）が「3次元レーザスキャナを用いた露頭掘跡と坑道の調査」、鳥越俊行氏（東京国立博物館保存修復課調査分析室長）が「佐渡金銀山の焼金竈の被熱温度」、井澤英二氏（九州大学名誉教授）が「佐渡金銀山の生産技術と産金量」と題し、それぞれの分野からの講演がありました。

佐渡金銀山遺跡の世界遺産登録へ向けた取り組みが近年、テレビ番組で取り上げられるなど、鉱山遺跡への注目が集まっています。そうした中で、全国の鉱山遺跡を有する自治体・団体同士の情報共有や連携もたいせつです。引き続き相互に情報共有しながら、継続的に情報発信し確実に研究成果をあげていかななくてはと感じた研修となりました。

12/2 金 大城金山砂金採掘坑

身延町大城および湯平の集落は安倍峠を中心にして梅ヶ島エリアのちょうど反対側に位置します。大城集落では、かつて砂金採集道具であったカッチャやネコザも残っていたことが伝えられ、また湯平集落には中世の砂金採掘跡とされる「通称・かなんば」が今に残っています。



茅小屋金山遺跡調査の前日、全国的に見ても珍しく特徴的なこの「かなんば」を久間先生と中西先生にご同行いただきながら、形状測量調査を行いました。坑道内部は人が中腰で歩くことができるほどの高さで、横幅は広く奥まで続き、壁面は石の礫が積み重ねられ、坑道の形を保っていることがわかります。しかし、このように現場は残っているものの、言及している地域文書は確認されておらず、河岸段丘に開口している坑口には昭和59年に旧身延町で建てた説明版があるのみです。湯平周辺の地質について『身延町誌』に以下のように記述されています。

(一) 洪積層
ア、段丘堆積物
—《中略》—

この高、中、低の三段丘にあたる地域例をあげれば、波木井古屋敷などは高位段丘であり、大城、湯平波木井坂などは中位段丘としてあげられ、低位段丘は下山、波木井、梅平、帯金など数多くあげられる。

特に梅平、鏡円坊付近の段丘は三段階のようすがよく残っており段丘の典型的なものである。—《中略》—

(三) 銅鉱床

榎の木トンネルの南の県道わきに銅鉱床があり採鉱されたが、現在は廃坑になっている。この鉱石は黒—灰色の輝銅鉱と緑色の孔雀石で、輝銅鉱は鉱物としては非常に珍しく美しい結晶面をもっている。大久保部落にも鉱床があり、現在採鉱している。湯平には金鉱を掘ったといわれる廃坑がみられるが、おそらく段丘地形の中における砂金の採鉱跡であろう。

(出典：『身延町誌』(昭和45年2月11日発行 身延町誌編集委員会編 第三節 地質、四、第四紀層～五、鉱物資源))

12/3 ㊦ 茅小屋金山遺跡

茅小屋金山遺跡内は、まだまだ謎だらけ。集めた情報をつなげて遺跡の全体像を解明するため、幾度となく現地の確認調査を行っています。目下、当館で現在一番力をいれて調査を進めているのが2021年の冬に新規確認された茅小屋金山遺跡の採掘域、そしてその周辺です。

この日、久間英樹氏と中西哲也氏(九州大学総合研究博物館)にご同行いただき、険しい山中に位置する3つの坑道と大露頭掘り跡について鉱山地質学的視点に立った確認とご意見をいただきました。また調査からの帰路には、茅小屋金山遺跡の採掘域と中心テラスとの関係性や、今後、詳細な発掘調査をした場合、遺物・遺構を確認できる可能性が高い場所はどのあたりかなど、改めて検証考察する機会をもつことができました。

なお、茅小屋金山遺跡の標高1,000～1,100m付近の山中には、幾つもの炭焼き竈が確認できます。この炭焼き竈については、かつて現地確認調査をし(館だより87号2頁参照)、この秋には一般参加者を募った臨地学習として、遺跡見学会も開催しました。(本紙6頁参照)

12/20 ㊦ LED 照明研修

「照明」は展示に欠かせない要素のひとつで、展示物をわかりやすく美しく見えるようにしてくれますが、反面、照明から発せられる紫外線による展示物の変色などの課題があります。これは博物館にとって非常に重要な問題であり、近年、資料保存やその性能からLED照明が主流となってきました。当館も含めた各施設がすぐハロゲン照明からLED照明へとすべて取り換えられるわけではありません。そうした状況の中、展示照明に関する最新情報と方向性を学んで今後の参考とできるように、このたび伊藤学芸員が静岡県立美術館で開催された研修に参加しました。

研修では、藤原工氏(灯光舎)による講義ならびに照射実践などのデモンストレーションが行われ、光・照明に関する基本的な事項や、照明を通じた視覚情報からいかに資料のもつ意味や情報を見やすく正確に伝達できるかなど、大きな学びがありました。

■ 活動報告 01 9/5 ㊦～10/10 ㊦ 写真展「金山博物館のまわりの興味ある自然」

博物館周辺は、豊かで興味深い自然を身近に見て、感じることでできる環境です。「金山の歴史を正しく知るためには、それをとりまく自然の理解から」という趣旨から、町政施行記念日の9月13日を中心に、町民利用の促進も期して写真展を開催しました。

当館館長が6年ほどの間に撮りためた自然の一コマをいくつかをピックアップし展示しました。期間中、子どもから大人まで幅広い世代の方が、生き生きとした自然の世界に驚嘆しながら鑑賞する姿が多くみられました。

■ 活動報告 02 10/3 ㊦ ミュージアムキャラクターアワード 2022 グランプリ獲得表彰式

この日、「ミュージアムキャラクターアワード 2022」の表彰式が、温かい雰囲気の中で執り行われました。アワード主催であるアイエムの古川氏よりご挨拶いただいた後、同氏からも一父さんへ表彰盾が授与されました。平日の午後にも関わらずお祝いのお花を用意して駆けつけてくださった方もおり、たいへん嬉しく感謝の思いでいっぱいセレモニーとなりました。現在、優勝盾は賞状とともにエントランス正面のガラスケースに収まり、自由にご覧いただけるようになっています。

■ 活動報告 03 10/8 ㊤ いでさんぽ「新富士橋架橋現場を見てみよう」

2年前の第5回では現・富士橋を見学しましたが、今回はその横で完成が近づきつつある鰍沢河岸跡の新・富士橋の架橋工事をテーマとし、前回の探訪からどのように変遷しているのか、新橋を対岸へつなげる工事のようすを付近の散策とあわせて見学しました。

そこでは、新たに架ける部分を、車輪を用いて新橋上をスライドさせ、国道52号側の岸から対岸へつなげようとしている状況がよく見えました。参加者からは「橋が二階建てのようになっている謎が解けた」、「工事過程を見学したことで開通が楽しみになった」といった感想とともに、充実した時間を過ごしていただけたようでした。また、当日は参加者へ現・富士橋の3連トラス橋のイラストが描かれた記念缶バッジを配布し、たいへん好評をいただきました。

■ 活動報告 04 10/15 ㊤ 遺跡見学会「炭焼き竈を探して 茅小屋金山」

次々と新しい発見がある茅小屋金山遺跡。遺跡周辺の山中では、多くの炭焼き竈がこれまでの調査で発見されています。この炭焼き竈周辺を改めて確認しながら、皆様にも知っていただこうと、見学会を実施しました。急峻な山中を進んでいくため、かなりの健脚であることが要求されますが、参加者された方は、そうした苦勞の末に見学できた竈について「山中にこのような形でこんなに幾つも残っているとは驚いた。今後の発見にも期待します。」との感想を述べてくれました。この竈についても引き続き研究を深め、お知らせして参ります。



■ 活動報告 05 10/16 ㊦ アースサイエンスウィーク地学実習

JAMSTECの企画として中山金山遺跡を中心に地学実習が行われ、当館から小松学芸員が講師として遺跡現地を案内しました。参加者からは、遺跡までの登山はたいへんだったけれど今に残る歴史の雄大さや金山がどのように地域の歴史とかかわってきたのかを知ることができ、満足だったという感想が聞かれました。

■ 活動報告 06 11/17 ㊤ 山梨学講座

山梨県では生涯学習の場としてさまざまな講座やワークショップを開催しています。その中のひとつ、山梨の歴史を深掘りする山梨学講座へ、当館の出月館長が講師として赴きました。「山梨・お金にまつわるヒストリー」と題し、貨幣、税制、経済政策など、各時代の治世や庶民の暮らしとも大きく関わっている“お金”に着目し、全3講座のメニューで開催されました。出月館長は「甲州金」をテーマに第1回を担当し、小判が登場する昔話などの身近な話題や考古学の視点に立った金採掘の歴史などわかりやすい話が展開され、会場ならびにオンライン聴講者とも大きな関心を集めました。

■ 活動報告 07 11/22 ㊦ 令和4年度 第2回 運営委員会

4月から現在までの博物館の運営経過と来年度の事業計画等について、ご審議・ご指導いただくための重要な会議がありました。これまでの成果について評価いただきながら、開館25周年の節目の中で、博物館の根幹である調研究活動と、博物館の未来と歴史継承のための人材育成をしっかりと推進させてほしいというご意見をいただきました。

■ 活動報告 08 11/22 ㊦・12/20 ㊦ 古文書教室

貨幣研究者で当館の運営委員もお勤めいただいている西脇康先生のご指導のもと、古文書教室を開催しています。西脇先生の歴史見分の広さから語られるわかりやすい講義に、参加者たちはたいへん熱心に取り組んでいました。地域史料を自力で読み解くことができる人材育成やその成果を今後の研究資料として活用し発信していくことを目標のひとつとしており、地域に残された古文書の読み解きを通し、地元の歴史や湯之奥金山について学びを深めています。

■ トピックス

年末年始限定商品「福缶 2023」大好評で完売

お家で砂金採りを楽しむことができる博物館完全オリジナルのロングセラー商品「ビックリ！砂金缶」。この砂金缶のお正月限定バージョン「福缶」は、お家でも砂金採りを楽しむことができる砂金入りの「夢の砂」の他、新年干支根付や甲州金レプリカなど新年を祝う縁起物が盛りだくさんの一品です。今回も多くの方がこのお得でスペシャルなひと缶を買い求めに来館し、年末・年始分とも完売いたしました。

もーん父さん 活動記録

- 10/22 ㊥～23 ㊦ ご当地キャラ博 in 彦根 2022
- 11/19 ㊥～20 ㊦ 世界キャラクターさみっと in 羽生
- 12/4 ㊦ 志木市民まつり ～カップパだよ！全員集合～

ひこにゃんやくまモンといった人気キャラクターをはじめ、全国のご当地キャラクターが集うイベントが、感染症対策に配慮しながら各地で現地開催され始めました。当館のもーん父さんも参加し、博物館をPRしてきました。

12/18 ㊦ 国道300号線 中之倉バイパス開通記念セレモニー

本栖湖方面へつながる国道300号線は、山間のつづら折りが続き観光バスなどの大型車両通行の難所でした。この解消に向けて整備工事が行われ、その一区間（1.8km）が中之倉バイパスとして供用開始となりました。開通記念セレモニーでは、山梨県知事や峡南市町村の長、関係者とともに もーん父さんも参列しました。

下部温泉郷－富士北麓の往来の安全性や利便性が向上したことにより、当館に多くの方が足を延ばしてくれることが期待されます。



山梨の遺跡発掘展2022 巡回展

県内各地の遺跡や発掘調査の最新情報がズラリ。毎年、県埋蔵文化財センターが実施している巡回展に当館テキストを交えて開催します。

- ・会期：1月20日(金)～2月20日(月)
- ・場所：博物館1階
エントランスホール壁面
※観覧無料



第11回 金山遺跡・砂金研究フォーラム

要申込

博物館を拠点にフィールドワークを展開している皆さんの経験や体験、疑問点などをテーマに日頃の研究成果を発表します。

- ・日時：2月4日(土) 午後1時～
- ・場所：博物館2階 映像シアター
- ・参加費：500円(資料代として)
- ・定員：50名
- ※発表者・タイトルは博物館HPへ

開館25周年記念 企画パネル展「鉱山史研究のいま」

- ・会期：3月21日(火・祝)～4月24日(月)
- ・場所：1階 多目的ホール ※観覧無料

湯之奥-中山金山では、平成元年から3年間、全国に先駆けて考古学を中心とした総合学術調査が行われ、それまで“伝説”であった金山が“史実”として明らかになりました。中山金山は黒川金山と共に甲斐金山遺跡として国史跡に指定されていますが、成果は『湯之奥金山の研究』としてまとめられています。現在、湯之奥-茅小屋・内山金山の国史跡追加を見据えた調査研究活動が継続的に行われ、新たな発見と共に研究成果も蓄積されています。

本展ではこの25年間の研究の進歩とともに、今、注目が高まりつつある鉱山遺跡について全国の事例を踏まえながら「鉱山史研究のいま」をパネルで紹介します。

編 | 集 | 後 | 記

2023年・卯年スタート早々に、46万人目のニュースと、正月の賑わいをお伝えできたところです。

三が日が過ぎれば小正月行事。当館ではご来館のお客様の目を少しでも楽しませることができればと、また、合わせて地域の行事や風習も知っていただけたらと、毎年「お山飾り」と「団子花」を制作しています。特に柳の木のような飾りはこの地域でよく見られ、家内安全や五穀豊穡等さまざまな願いを込めて建てられます。

今年も博物館応援団メンバーのパワーを借りながら色あざやかな飾りが完成しました。博物館にとって、みんなにとって実りのある一年となりますように。



・・・ 博物館 冬季ご利用上のご注意 ・・・

開館時間 ▶ 9時～17時まで(最終受付16時30分) 毎週水曜休館(祝日にあたる場合はその翌日)
新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を施したうえで開館しています。館内のご利用及びイベント参加においてはマスク着用、検温と個票記入、暖かい服装でお越しください。引き続きの感染症対策に、ご理解ご協力をよろしくようお願い申し上げます。またお車で越しの際は、冬用タイヤ装備などの路面凍結対策を講じ気を付けてご来館ください。

